

第47号

2018年6月発行

【発行元】
港区芝地区総合支所協働推進課
発行部数30,000部

芝地区 地域情報誌

『芝地区地域情報誌』は、地域の皆さんとともに創る情報誌です。芝地区の「いい話」を紹介したり、さまざまな行事や活動の情報を交換したり、地域の皆さんと一緒に地域のことを考えていく場として、地域情報誌を発行しています。

東京タワー トップデッキツアー



TOKYO TOWER
TOP DECK TOUR



～開業60周年 東京タワーからのおもてなし～

平成30年(2018)12月に開業60周年を迎える東京タワー。アニバーサリーイヤーである今年、高さ250mにある特別展望台の名称を「トップデッキ」に、高さ150mの大展望台の名称を「メインデッキ」に改め、3月3日にグランドオープンを果たしました。

オープンと同時にスタートしたのが事前予約制(時間指定制/有料)の体験型展望ツアー「トップデッキツアー」です。

今回は、東京タワー観光本部営業部マーケティング課主任の根岸直美さんに案内していただきました。

『「トップデッキ」からの展望が体験できるのはトップデッキツアーに参加された方の限定になります。ツアー参加には東京タワー公式ホームページから事前予約が必要ですが、予約されていない方も、当日の予約状況によっては空きがある場合もございますので、スタッフにご確認ください』

それではトップデッキツアーへGO! まず待ち時間が少ないことに特別感があります。入り口で予約時に発行されたQRコード*でチェックイン。13言語対応のガイドシステムにより流れがとてもスムーズです。

はじめにメインデッキでの景色を体感。次に東

*QRコード:2次元バーコードの方式の一種で、モザイク状の四角い形が特徴。



ジオメトリックミラーとLED照明で演出されたトップデッキ

京タワーの新旧の歴史を紹介する「タワーギャラリー」、そして「シークレットライブラリー」へと、ツアーは続きます。

また合間には、タワーアテンダントからのドリンクサービスやフォトカードのプレゼントがあり、ホッと一息。こうしたきめ細かで、温かなおもてなしが東京タワーの観光ならではの魅力に感じられました。

そしていよいよトップデッキツアーのクライマックス、最上階の「トップデッキ」です。

ジオメトリックミラーとLED照明で演出された空間で、季節や時間ごとに移ろう東京の景観を360度、時間制限なく、心ゆくまで楽しむことができます。

21世紀へと、時代とともに歩んできた東京タワー、60周年を機に新しく誕生した「トップデッキツアー」に参加してみたいはいかがでしょうか。

取材・文:桑原 庸嘉子

Information

日本電波塔株式会社【東京タワー】

芝公園 4-2-8

TEL 03-3433-5111

<https://www.tokyotower.co.jp/>

(予約方法、料金等は公式ホームページで確認を)

写真提供:日本電波塔株式会社



13の言語に対応したスマートフォンタイプの音声ガイドを貸し出し



専用エレベーターでトップデッキに。ツアーは完全予約制(時間指定制)



ドリンクでおもてなし。東京タワーが描かれた特製カップは持ち帰り可能

歴史探訪

顕微鏡、望遠鏡、 覗き眼鏡絵に魅せられた司馬江漢

享保、寛政、天保の改革(1716-1843)の間に、町人文化が江戸で花開き、絵草紙の戯作者や浮世絵師が多く出現した。一方、八代將軍徳川吉宗(1684-1751)が洋学に道をひらき、蘭学の影響は、医学、本草学、博物学、化学、絵画、大工、さらに地理から兵法に、天文学、画匠、工匠にまで及んだ。

その時代に芝神明前に住み、唐画、掛軸、浮世絵、油彩洋風画を描き、洋式腐食銅版画を創り、世界地図を描き、絵に遠近法を作る覗き眼鏡を持ち歩き、コペルニクスの地動説を普及したひとりの啓蒙家があった。

「芝」育ち

安藤吉次郎(1747-1818)は庶民の子で、教育熱心な母の里、繁栄している芝神明前に来て、絵と学の才能を育てていった。伯父に画才を認められ、狩野派で習い、多色刷り浮世絵を創った鈴木春信(1725-1770)の画工となっている。24歳ごろから鈴木春重と名乗り、多くの絹本、浮世絵などを描いた。また写実に力を入れた唐絵師宋紫石(1715-1786)に学び、後に吉次郎は芝新銭座(現東新橋2丁目12、13辺)に移り、絵に「芝門」や「芝門宇田川神徳座」などと場所名を入れている。

一方、前野良沢(1723-1803)の弟子、芝金杉の大垣藩蘭医の吉川宗元の知遇を得て、

宗元宅で儒学、本草学者に読書、講釈を学び、漢学の教養を身に付け、25歳のころに「詩を印すのに唐風にあらずば風雅ならずとて、名を峻、姓は司馬、字は君嶽、号は江漢」と決めている。

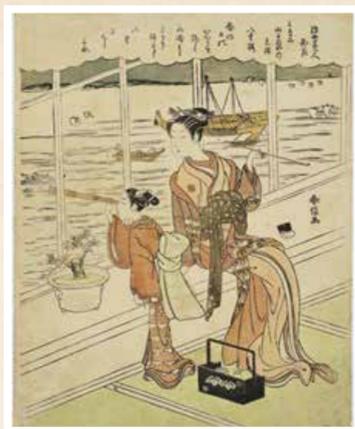
蘭学

27歳のころの「大小絵暦・白梅花」(1774)で、江漢司馬峻寫と書き姓名が西洋風に逆さになっている。

それは、江漢が解体新書を訳した蘭学者前野良沢の弟子に名を連ね、蘭学者、博物学者でエレキテル(静電気発生装置)を作った平賀源内(1728-1780)たちとも交流し、蘭医大槻玄沢(1757-1827)の芝蘭堂(蘭学勉強会)に加わり、多くの蘭医、蘭学者、絵師たちと交流をして洋学の知識を身に付けたからであった。

特に西洋画の「濃淡を以て陰陽凸凹遠近深淺をなす者にて、其の真情を模せり」という色彩値を意識した写実画法に江漢は惹かれ、さらに大槻玄沢と洋式腐食銅版画を日本で初めて創成した。37歳、遠近法を創る凸レンズを使った覗き眼鏡で見る彩色銅版画「三囲景」を天明3年(1783)に作成している。天明8年(1788)、長崎出島への一年間の旅の途中で、各所で人々に「覗き眼鏡」を通して絵を見せ、画面に遠近を感じさせ驚かせている。

寛政8年(1796)に洋風油彩画「相州鎌倉七里浜図」を描き、「西洋画士:Sa Kookan」とローマ字で署名し、これを東都芝愛宕山神社に、さらに芝神明宮に「鉄砲洲より芝浦を望む図」を、塩釜神社に「石の巻図」を寄贈して名声を得ている。



遠眼鏡(望遠鏡) ■浮世絵
鈴木春信作「浮世美人寄花みな山さきや内元浦八重楼」
1768-1769年頃作(たばこ壷の博物館所蔵)

格物致知

物事を探求し新しい知識がひらけること(格物致知)に関心を持ち続けた江漢は、蘭学を通して今まで肉眼で見えないものに挑み、顕微鏡で雪の結晶、蚕などを覗き、望遠鏡で月の観察ができることを知った。西洋銅版画を見た江漢は、人々に理解させよう「図絵」が「文字」に優る手段とみて、銅板世界地図、地球全図略説を描き、さらに天文学に進み、寛政8年(1796)に和蘭天説、文化5年(1808)に「刻白爾天文図解」を出版、江戸時代に「地動説」に言い及んでいる。

さらに江漢は、各藩お抱えの医師の多い芝蘭堂蘭学者番付表に「唐絵やの」稚猿松(小生意気な小僧著者注)と軽く見られていたが、封建制度の「士農工商は皆字と知り書と読む故に万物明かに通ぜざる事なし」と書いている。つまり、「身分」は表記に過ぎず、人は同じであるという格物致知に達している。

生涯

書画会で、創った絵、覗き眼鏡と銅版画、耳鏡(補聴器)、和蘭陀茶臼(コーヒー豆挽)などを売り、長崎、京に旅し、回顧録などを書き、規格外に生き誰にも仕えることはなかった。金銭問題で芝新銭座を離れ、最後の4年ほどを隠居の麻布桜田町(現西麻布3丁目)で暮らし、庶民出の不世出の絵師として多くの作品と洋風画などを残し、啓蒙家としての生涯を終えた。

取材・文 森明

参考文献
塚原見編「司馬江漢百科事典 解説図録」/神戸市立博物館
成瀬不二雄著「司馬江漢全集1-4」/八坂書房
成瀬不二雄著「司馬江漢 生涯と画業 本文篇」/八坂書房
大槻玄沢「六物新志2巻[2]」/国立国会図書館デジタルコレクション
大槻玄沢「蘭学階梯 2巻」/国立国会図書館デジタルコレクション
中野好夫著「司馬江漢考(12)」/美術手帖31(452)
池田美美/丹波理恵子編「のぞいてびっくり江戸絵画」/サントリー美術館
※漢字でコペルニクスを「歌日尼」、ケプラーを「刻白爾」と表記するが、江漢は間違えたか、ケプラーの楕円軌道説を知っていたのであろうか。



覗き眼鏡 ■浮世絵
鈴木春信作「高野の玉川 組物 六玉川」
1764-1770年頃作(神戸市立博物館所蔵)



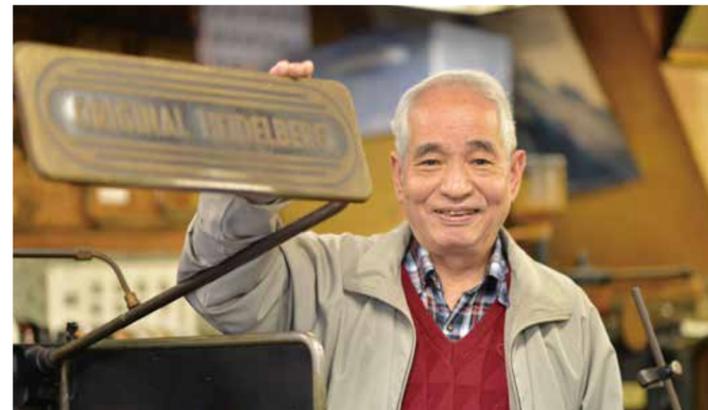
顕微鏡
森島中良著「紅毛雑話」5巻所収
1787年刊(国立国会図書館所蔵)

VOICE 芝人

孤高の活版印刷所

大角印刷所

おおすみ おさみ
大角 長生さん



変わり続ける虎ノ門で、唯一となった活版印刷所を営む大角長生さん

虎ノ門ヒルズを仰ぎながら、表通りから一つ横丁に入ると、「シューガッちゃん、シューガッちゃん……」と金属音が鳴り響く。昭和のころには、まちを歩くときよく聞こえていた懐かしい音だ。外からもよく見える黒い大きな機械は、ドイツの有名メーカー、ハイデルベルグ社製の凸版印刷機。1960年代と1970年代に製造された二機が並んでいる。

印刷ひとすじ

大角長生さんは印刷一筋53年。先代である父の貞馬はもともと商社勤務だったが、戦地から復員して大角印刷所を創業した。しかし、昭和39年(1964)に急逝。大学2年生だった長生さんは、学業を続けながら後を継いだ。

霞ヶ関の官庁街からも近いこの場所では、かつて同じ町内に10軒近い印刷屋があり、納品書・領収書などの伝票類やハガキ、名刺といった、いわゆる「端物印刷」の注文が多かった。やがてパソコンが普及し、またペーパーレス化も進んだことから、伝票類の注文はほとんどなくなった。印刷屋も次々と廃業し、町内では大角印刷所だけになった。

印刷の仕事が続ける力の源

「いくらパソコンが普及したからと言っても、結婚式の招待状や会社の挨拶状とか、特別なものは今でも印刷屋に頼むでしょう? 印刷屋は減ったけれど、まだまだ町の印刷屋として必要とされているから続けているんですよ」

パソコンやオフセット印刷機では出せない独特の味わいを求めて、便箋や封筒、またこだわりの名刺の注文もあるそうだ。



ハイデルベルグは大角さんのキャリアのほとんどを共にすごしてきた相棒だ

かわりゆく虎ノ門

「私が虎ノ門一丁目琴平町会の町会長をやっていた平成元年ころは、金比羅さん(虎ノ門金刀比羅宮)で植木市があつたね。植木屋以外の露店もあつて賑やかだった。町内だけでなく会社帰りの人や、遠方からわざわざ来る人もいた。植木市は季節感もあつてまちに活気があつたね。また復活させたいけど、今はほかにいろいろ娯楽があるから難しいだろうね」

虎ノ門では大規模な再開発計画が進んでいる。「東京オリンピックが終わるころには、この辺りも取り壊しが始まるかもしれない」とのこと。さみしいですかの問いに「昔からの風景がなくなるのはさみしいけれど、仕方がない。時代に合わせてまちも変わらなきゃいけないからね」。

昔からの虎ノ門の風景を皆の記憶に残したい——虎ノ門の変遷とともに人生を歩んできた大角さんの切なる願いだ。

取材: 菊池 弓可/森明 文: 菊池 弓可

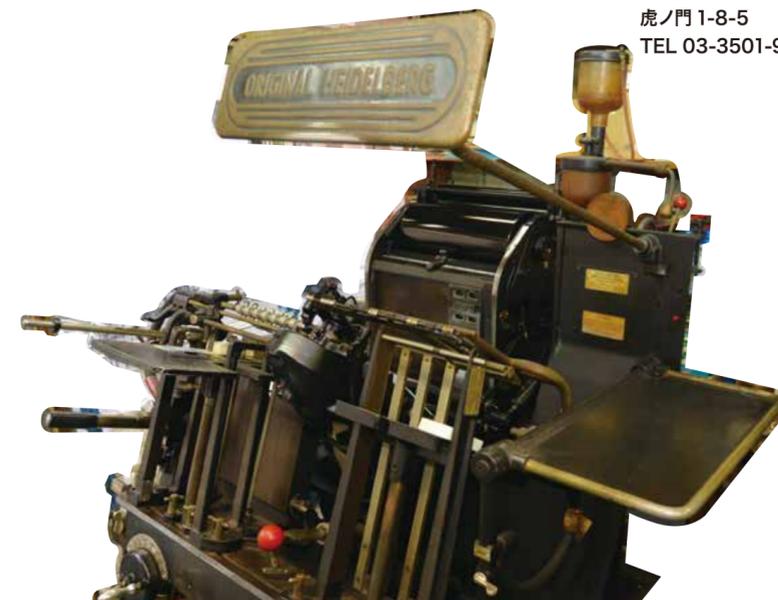


存在感のある当時は西ドイツだったハイデルベルグ社の活版印刷機。現在は生産されていない希少なものだ。1960年代、1970年代につくられた二機を所蔵し、下の写真は1970年代のもの



Information

有限会社大角印刷所
虎ノ門1-8-5
TEL 03-3501-9095



「働き、役立ち、学び、楽しもう！」を 応援します

仲間を作って楽しく社会活動をし、 充実した日々を過ごす

豊かで活気ある長寿社会を構築し、生きがいをもって人生を過ごすため昭和63年(1988)に設立された公益社団法人 長寿社会文化協会(WAC)。

地域でのコミュニティづくりの推進、世代を超えた助け合い活動、生涯学習の推進、調査・研究・提言活動など積極的に社会参加するための行事を主催し、企画プロデュースとコーディネイトをしています。在宅介護サービスや健康麻雀サロン、ハイキングや山登り、企業の商品開発や販売促進、コミュニティリーダーの育成ほか多岐に渡った内容です。

この事業は全国の行政やNPO団体などと協働してネットワークを作り、シニアの社会貢献活動を後押ししています。昭和63年(1988)に経済企画庁(現・内閣府)から主務官庁として許可され、平成7年(1995)に経済企画庁と厚生労働省の共管となりました。そして平成22年(2010)6月1日、公益社団法人として認定されました。

55歳からの求職者への求人を紹介

急速に高齢化が進んでいる日本ですが、港区の人口253,639人(平成30年1月1日現在、外国人も含む)中、55歳以上の人は68,598人も占めています。シニアといってもまだまだ現役で活躍している方や、短時間でも働いて社会と繋がってほしいという高齢者の方が沢山いらっしゃいます。

芝地区でのWACの事業として、平成21年(2009)から港区から委託を受けて、シニア専門の無料職業紹介所「みなと＊しごと55」を運営しています。

仕事を探しているおむね55歳以上の人たちに無料で仕事を紹介。スタッフとの面談を通し経験や能力が生かせる職種を、また求人依頼している企業には適任者を紹介し、双方の就労、雇用支援をサポートしています。

現在の求職登録者数は約6,700名で最高年齢は88歳。求人登録企業は約2,000社で、毎月更新しています。職種はさまざまですが、多いのが警備、清掃、調理補助の仕事です。

小野澤誠所長は「港区は大企業や有名店なども多く安心して仕事をさせていただいていますし、シニア世代でも受け入れてくれる企業も増えて来たために就職率も良くなりつつあり、紹介のし甲斐があります」とのこと。



セミナーで講師をする小野澤誠所長(写真提供:みなと＊しごと55)

再就職支援セミナーと合同就職面接会を年4回開催するほか、スタッフたちは職場の挨拶回りや新規求人開拓、求人のチラシを配布するなど情報提供に努力されています。

「みなと＊しごと55」の紹介で芝大門にある老舗の八百屋「八百伊」に就職が決まった平沢諭さん(71歳)は「昨年9月から、1日4時間の勤務です。主な仕事は注文品を仕分けして配達すること。運転が好きなのと自分の時間も充分にあるの

で、いいなと応募しました。店の雰囲気も良く、楽しんでやっています」と、毎日頑張っています。

お年寄りになったつもりで高齢者疑似体験

高齢になると身体や脳の機能が少しずつ変化してきます。そんな不安な気持ちを理解するために、高齢者疑似体験を実施しています。

色覚変化や視野が狭くなってしまふメガネや聞きづらくなる耳栓、ひざ関節が動きにくくなったり、筋肉が落ちて歩くのに躓いてしまう体験をするサポーターや重りなどの用具を着て歩いてみる着せセット「うらしま太郎」。小学生には「つくし君」といったプログラムがあり、お年寄りの気持ちに寄り添い、コミュニケーションの取り方や関わり方を学ぶことができます。近年、このプログラムを使った体験を授業に取り入れている学校が増えているそうです。授業以外にも実際に体験してみたい方に、WACでは個別指導(グループ単位)も受け付けています。

取材・文：千葉 みな子



「つくし君」を装着して街中を高齢者疑似体験する小学生たち(写真提供:長寿社会文化協会)

Information

公益社団法人 長寿社会文化協会(WAC)
芝公園 2-6-8 日本女子会館 1 階
TEL 03-5405-1501
みなと＊しごと 55
芝 5-18-2 港区立労働福祉会館内
TEL 03-5232-0255

芝会議 地域コミュニティ部会レポート

“芝を楽しむ集い” 芝でお酒が!?

芝で100年ぶりの酒造り

昨年2月の「芝エビってなんだ!」に続く「芝を楽しむ集い」第二弾「芝でお酒が!」が、今年3月3日に催されました。定員20名の募集も、その日の内に満員となる盛況ぶりでした。

この日の見学先である「東京港醸造」を運営する若松屋の七代目斎藤俊一さんから、若松屋の歴史を解説していただきました。

若松屋は文化9年(1812)に芝で創業して以降、近くの薩摩屋敷や幕末の志士との関わりが深く、繁栄していました。しかし、後継者問題、酒税法の変化に伴い、明治44年(1911)に酒造業を廃業し、以後雑貨店として経営を続けていました。七代目に当たる斎藤さんの酒造業復活の思いが高まり、平成28年(2016)に清酒の製造免許を取得。芝での酒造りが約100年ぶりに復活することになりました。



三田いきいきプラザで「芝と若松屋」の説明を受ける

地の利を生かした販売方法

芝4丁目交差点近くに「東京芝の酒醸造元」の看板が掲げられた、間口6mほどの4階建てビルがあります。正面の入り口は店舗ですが、内部は徹底した温度管理のもとで、年間を通して酒造りが行われています。醸造には雑菌は禁物。残念ながら建物内に入ることはできません。そのため詳しい説明は会議室で行われました。

ビデオで醸造所内部が紹介され、その後、斎藤さんと二人三脚で若松屋を復活させた杜氏の寺沢善美さんより、同蔵の酒造りの説明がありました。

酒造りの水は、荒川水系の「水道水」を使用しています。東京の水道水は高度な浄水処理がなされ、各地の名水と硬度が近い中軟水のため、酒造りに適しています。また大規模メーカーのような貯蔵タンクを持たず、さまざまなお米、酵母で多種を少量ずつ醸造する方式を採用しています。酒は造ったらすぐに搾り、瓶詰めして出荷。絞ったその日のうちに酒販店に卸すというスピードが特長で、都心という地の利を生かし、従来とは違う酒の楽しみ方を提案しています。

酒造りの説明のあと、アルコール発酵前の甘酒、純米どぶろく、純米原酒、外国向け



若松屋の七代目である斎藤俊一さん(左)と、若松屋の酒を造る杜氏の寺沢善美さん

の新しいお酒など、出来立てのお酒を試飲。参加者一同、和気あいあいとした午後を過ごしました。

取材・文・写真：米原 剛



醸造所の通りを挟んだ向かいのビルにある会議室。工場内部をビデオで学ぶ。窓の向こうが醸造所だ



4階建ての建物内部では蔵のラインで酒造りが行われている。左は試飲で提供されたお酒

Information

株式会社若松 東京港醸造
芝 4-7-10
TEL 03-3451-2626
<http://tokyoportbrewery.wkmt.com>



施設内外の活動編

今回は三田・神明・虎ノ門のいきいきプラザ3館の事業の中で、施設の内外で実施している講座やイベントについて紹介いたします。

取材・文・写真:米原 剛

出前講座

いきいきプラザを知っていただくためのきっかけづくりとして、

各種の出前講座が行われています。芝地区内の集合住宅の集客室などに職員が出向き、いきいきプラザで実施している事業の体験を行っています。

例えば、トレーナーが体操を指導する「いきいき体操」では、動作の一つ一つを丁寧に指導してくれます。マスターすれば、家でも出来ますので、ぜひ行ってください。また最近では「愛宕コミュニティはうず」で開催される「とらサロン」にも協力しているとのこと。

出張講座をご希望の場合は、各いきいきプラザに連絡、相談してみましょ。みなさんに最適な講座を紹介してくれます。



夏のイベントを紹介

夏に実施されるイベントをご紹介します。3館で企画しているのは、どれも年代を超えて楽しめるものばかりです。ぜひお出かけを。

みたまつり

年1回のお祭り。様々なブースが設置されるほか、飲食コーナーもあり、子どもから大人まで楽しめるお祭りとなっています。ステージでは、施設を利用している団体や自主グループの方々によるイベントが開催されます。

開催日 7月7日(土) 11:00~(予定)
開催場所 三田いきいきプラザ



とらトピア夏まつり

年1回のお祭り。毎年、テーマに合わせた出店やブースをご用意しています。お客さまと職員がともに楽しめるように、創意工夫しています。

開催日 8月4日(土) 11:00~(予定)
開催場所 虎ノ門いきいきプラザ



プラザ神明フェスティバル

神明保育園、神明子ども中高生プラザとともに、年2回のお祭りを実施しています。9月は国際交流や企業交流、芸術・その他交流、飲食など4つの特色あるブースが楽しめるお祭りです。12月は様々な体験ブースのほかに、ステージ発表や抽選会など楽しい催しが用意されています。

開催日 9月8日(土) 11:00~16:00(予定)
12月8日(土) 11:00~17:00(予定)
開催場所 プラザ神明



イベントの写真は昨年夏に撮影したものです

Information

芝地区のいきいきプラザ3館では、近くの方々が、外に出て、楽しい時間が持てるような様々な企画を用意しています。ぜひ、いきいきプラザにお出かけを。そして楽しいイベントに参加してみませんか。

三田いきいきプラザ
芝4-1-17 TEL 03-3452-9421
神明いきいきプラザ(プラザ神明)
浜松町1-6-7 TEL 03-3436-2500
虎ノ門いきいきプラザ(とらトピア)
虎ノ門1-21-10 TEL 03-3539-2941



●写真・資料提供 指定管理者: 百葉の会・東急コミュニティ共同事業体

芝の老舗

赤レンガ通りの老舗金物店

「タカトク金物」

新橋駅から環状二号线を徒歩で5分ほど。赤レンガ通りを右に入ると「CAMEL」と記されたラクダの商標のタカトク金物株式会社があります。大正11年(1922)1月創立の建築・家具用の金物の卸を行う老舗です。平成14年(2002)に店内を改装し、現在は工具類なども取り扱っています。

家具の取手・つまみ・手摺金物などが所狭しと並んでおり、特殊なデザインや高級な印象の家具金物に心惹かれます。奥には西洋家具発祥の地といわれる芝で家具金物業を営んだ初代・高橋徳太郎翁の胸像が、その歴史を見守っています。

老舗タカトクのルーツ

タカトクのルーツは、明治初期より家庭金物店を営んできた高橋金物店です。

第一次世界大戦が終わり、横浜港には多くの西洋家具が入ってくるようになります。築地を経て新橋に至るまで、たちまち家具店が軒を並べるようになり、タカトク界限は西洋家具発祥の地と呼ばれました。

このころから、官庁、銀行、デパート、病院などを中心に洋風の建築が増えました。引戸から開き戸に代わり、室内は座布団が椅子になり、障子に代わってガラス戸が出現。窓にはカーテンがかり、畳からリノリウムや絨毯になるなど、生活様式が変わっていきました。

そんな時代の流れに着目した初代は、西洋家具金物を扱う高橋徳太郎商店として「高徳商店」を創業します。当時の商標は金物店の代名詞、曲尺を表す「ㄣ」に「徳」で「かねとく」と読みました。その後、時代の流れとともに現在の「タカトク」となります。

まちとともに生きる老舗

四代目の高橋清社長にお話を伺いました。「戦後まもなくの生まれ。ずっとこの地で育ってきましたので新橋には愛着があります。子どものころ、この辺りは下町でした。家具職人がワザを競う家具品評会があり、タカトクは『精魂込めて作られる家具に沿う良いパーツを提供しな

くては』との思いで、家具のパーツを家具職人に提供していました。

家具には流行があります。生活様式の変化によって、家具も建具も変わってきます。例えば『バリアフリー』は扉のスタイルを変えました。下にレールがない上吊り引戸は、敷居がないため、床面がフラットになり、段差につまずいたり、ひっかかったりという危険を軽減します。また開閉の際、音が静かな家具も需要が高まっています。こうしたニーズに合うものを作っていないと生き残れません。家具の取手やつまみを隠すスタイルが見られますが、オリジナルの商品を作り続けていくことも大切にしています」。

四代目になるべくして育った高橋社長。大学卒業後、関西で修業を積んだ経験があり、スチール業界での経験が今でも役立つとのこと。



美しい花をあしらった陶器製の取手。形状も豊富だ

「海外の安価な家具がオンラインで販売されている時代。国内の金物業界は、お互いに協力し合い、変革を続けながら、時代と消費者のニーズに応えるように努めています。タカトクも販売のみならず、新しいものを取り入れ、オリジナルブランドを作り、高品質なモノづくりを続けていきたい」とこれからの夢を語ってくださいました。

老舗の志

平成26年(2014)に新虎通りが開通し、タカトクの周りは日々様子が変わっています。街を歩き交う人の流れが変わりました。新しく植えられた樹木に、心無い人が落としていったゴミが目立ったこともあり。今は早朝から街を清掃する活動に取り組まれるなど、魅力あるまちづくりに、働く人も暮らす人も参画しています。

未来に向かっていく新橋・芝の姿を高橋社長は次のように語っています。

「新橋には新橋の『顔』が必要です。均一な街に



四代目の高橋清社長。新橋が、過去と未来が共存する多様性のあるまちでいてほしいと願う

なるのではなく、飲食店の賑わいや新旧の店がひしめきあふ『多様性』が必要だと思います。整備されつくすのではなく、昼も夜も人々が行き交い、時代の流れとともにごちゃごちゃ入り交り続ける街であってほしいです」

守り改革していく老舗の力とは、柔軟に多様性に富む力なのではないでしょうか。未来へ歩み続けるタカトクの志を感じました。



取手の形状やサイズの豊富さにも目を見張る。「どんなところに似合うかな……」、そんな想像力を掻き立てられる



取材：森 明／早川由紀
文：早川由紀
参考文献：「芝家具の百年史」(1966年) 依元昭福(東京都芝家具商工業協同組合) 「万年小僧新どん奮闘記 老舗「タカトク金物」の歩み」角田新一著(ジャーナルプレス) 「都心における「場所の個性」とその可能性～土地柄や気質からみる商業盛衰と大規模開発進行より～」(早稲田大学第一文学部社会学専修4年 塚本淑子／2003年度卒業論文)

Information

タカトク金物株式会社
新橋 4-4-4
TEL 03-3432-4366
<http://www.takatokukanamono.com/>

三和鋳螺

惜しまれる移転

桜田通りの虎ノ門二丁目・三丁目は2020年に向けて大きく生まれ変わろうとしている。高層ビル建設や地下鉄の新駅設置工事が着々と進む。こうした変化に伴い、桜田通りにある老舗もいくつか消え去ろうとしている。老舗の蕎麦店、60年続いたハンコ店、骨董店……そして虎ノ門三丁目(旧巴町)で65年続いたねじ専門店もその一つだ。

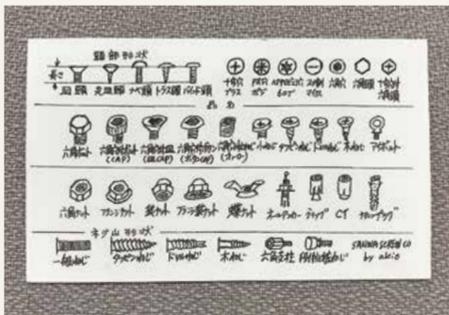
三和鋳螺はねじ、作業工具などを取り扱っている卸売業である。約4万種類ものねじを揃え、国内外からひっきりなしにファクスやメールでの注文が入ってくる。ネジの頭の形状、直径、長さ、ねじの粗さ、全て1mm単位で分類された箱がぎれいに並ぶ。種類ごとの箱の側面には几帳面な字で「5×12」などと書かれているが、これは「直径(太さ)・長さ」を表示しているという。

ねじのことに限っては一步も譲らない「がんこ職人」の社長、石井章夫さんと娘の上條佳世子さんにお話を伺った。

章夫さんの父である初代は銀行から転職して、戦後「ねじ屋」を始めた。初代が大病をしたため、章夫さんは大学の工学部入学後に店を手伝うようになり、その後、社長として店を引き継いだ。現在は章夫さん、息子のたけともさん、娘の佳世子さんの3人で店を守っている。65年間、ずっと家族のみで経営してきた。



左から三代目石井健友さん、石井章夫さん、上條佳世子さん。店を守る3人だ



社長の名刺の裏面には手書きのねじが書かれている

接客するのは佳世子さんの役目だが、難しい話になると社長である章夫さんにバトンタッチするも頑固一徹の社長とお客の間に入って、うまく纏めるのは佳世子さんの役目だ。親子ゆえに阿吽の呼吸で、技術は社長、接客は物腰の柔らかい佳世子さんとうまくバランスがとれている。

中二階にもねじの箱がびっしりと並び、人ひとりが通れるところで三代目の健友さんが受注の仕事をこなしている。「インチねじ～メートルねじ」と銘打っているだけあり、ありとあらゆるねじがあり、米国規格のねじも揃っている。社長に仕事のおもしろさを聞いたところ「『他の店にはないものがここでは見つかった』と言われた時が嬉しい」と満面の笑みで話してくれた。

虎ノ門での営業は平成30年(2018)4月末で終了し、大田区に移転した。しかし三代目も共に店に立つ「三和鋳螺」は、これからもねじ一筋で営業を続けていく。

取材・文：伊藤早苗



緑の庇に見覚えある方も多いはずだ



新駅設置工事が急ピッチで進んでいる桜田通り



時折笑顔を交えて説明する石井章夫社長。背後には箱がびっしり並んでいる



昭和30年代の初代

町会・自治会トピックス

「まちを見守る」～芝三丁目松本町会～

町会は、地域に見えないところでまちの安全安心を守る「縁の下の力持ち」としての役割を担っています。ここでは、芝三丁目松本町会の例を紹介します。芝三丁目松本町会では、このところ、自転車の接触事故や火事、空き巣といった事故や事件が多数、発生しました。こうした状況を案じ、「地域の安全安心のため、町会で何かできることはないか」という検討が行われました。そして、今年3月、区の補助金を利用し、防犯カメラが8カ所10台設置されました。まちに防犯カメラを設置することは、公衆の安全確保や犯罪の未然防止につながります。今後の犯罪・事故発生率の低下が期待できるでしょう。

文：芝地区総合支所協働推進課



町会会館脇にも設置されています



芝の家・ちゃぶ台日誌 春編

さて明日の芝の家では
どんなことが起きるでしょう。

どなたでも自由に入出入りできるまちの交流拠点「芝の家」には、日々近所の方から遠方の方まで、年代も赤ちゃんから学生、シニア世代の方まで、多種多様な方が立ち寄り、それぞれの時間を過ごしています。

「芝の家」は芝地区の地域事業「地域をつなぐ！交流の場づくりプロジェクト」の拠点となっています。港区芝地区総合支所と慶應義塾大学の協働で始まり、事務局スタッフとボランティアスタッフが日々の運営をしています。姉妹拠点「ご近所ラボ新橋」(新橋6-4-2)と合わせて気軽にお立ち寄りください。

タイトルにもなっている「ちゃぶ台日誌」は、芝の家ホームページにて日々の様子やイベントのお知らせを投稿するブログのタイトル。今年度はこちらの芝地区地域情報誌でもお届けできることになりました。ぜひホームページも合わせてご覧ください。



写真協力:芝の家 文:芝地区総合支所協働推進課

芝浦から来場する方が近所で落をたくさん摘んでくれました。皆さんで落の筋取りの手しごとをしました。また別の日には、芝の家で育てているよもぎの若葉を摘み、白玉よもぎ団子をみんで作って食べました。季節の手しごとの持ち寄りも大歓迎です。



芝・三田界隈の古い写真をきっかけにしたお話し会。近所の方にお声がけしたところ、多くの方が集まれ、おしゃべりに花が咲きました。

昔懐かしい佇まいの外観、縁側、のんびりした雰囲気の室内、コミュニティ喫茶(無料のお茶とコーヒーなど)や駄菓子の販売屋台もあります。おもちゃで遊んだり紙や布でものづくりをしたりする方、宿題をしたり読書をしたりする方、砂糖を持ってきてべっこあめをつくって遊ぶ小学生もいました。思い思いの過ごし方をしながら、ゆるやかな交流が生まれています。

Information

芝の家
芝 3-26-10 TEL 03-3453-0474
開室日時: 火・木曜日 / 11:00 ~ 16:00、水・金・土曜日 / 12:00 ~ 17:00
休: 日、月曜日、祝日

芝 de Meet The Art ~アートに親しむまち、芝~

芝地区総合支所では、地域のにぎわいやイメージアップにつながるようなアート作品を展示し、安全・安心の向上やアートとふれあえる環境の創出をめざす取り組み「芝 de Meet The Art~アートに親しむまち、芝~」を実施しています。

昨年度は、港町架道橋内に工房アミ(生活介護事業所)の皆さまの作品をアーティストの山本修路さんの監修によりアートとして設置しました。また、区立塩釜公園内ベンチ後方の壁面に区立御成門中学校美術部の作品を使用したアート2作品、工房アミの皆さまの作品を組み合わせたアート1作品を設置しました。その他、御成門中学校美術部でワークショップを行い、落ち葉のモチーフを作っていたいただき、港町架道橋入口にペイントして壁画を制作しました。

アート作品の除幕式を行いました!

平成30年(2018)2月6日(火)、区立障害保健福祉センター7階竹芝小記念ホールにて「芝 de Meet The Art~アートに親しむまち、芝~」のアート作品の除幕式を行いました。

除幕式にはアート作品の制作にご協力いただいた工房アミや御成門中学校の皆さん、地元町会長にも参加していただきました。

アート作品は設置を完了しておりますので、ぜひ作品を見に、港町架道橋及び区立塩釜公園にお越しください!

問い合わせ先: 芝地区総合支所管理課 TEL 03-3578-3191



港町架道橋 浜松町2丁目13番14号付近



区立塩釜公園 新橋5丁目19番7号

●本誌の制作には以下の編集委員が参加しています
伊藤早苗/菊池弓可/桑原庸嘉子/柴崎賢一/柴崎郁子/田岡恵美/竹田和行/千葉みな子/町田明夫/森明/森田友子/米原剛(五十音順 敬称略)
●今後の発行スケジュールは次の通りです
2018.9(第48号)、2018.12(第49号)、2019.3(第50号)、2019.6(第51号) ※各号発行月の20日ごろ

芝地区地域情報誌の配布について
芝地区総合支所【芝、海岸1丁目、東新橋、新橋、西新橋、三田1~3丁目、浜松町、芝大門、芝公園、虎ノ門、愛宕】内の地域の方にお届けしているほか、地区内各施設などで配布しています

芝地区MAP

本誌に掲載した記事に出てくる施設などをまとめました。ウォーキングマップとしてご利用ください。

1~20は旧町名由来板の設置場所

- 1 東京タワー → P1
- 2 大角印刷所 → P3
- 3 長寿社会文化協会 → P4
- 4 みなと*しごと55 → P4
- 5 若松 東京港醸造 → P5
- 6 三田いきいきプラザ → P4・5
- 7 神明いきいきプラザ → P4・5
- 8 虎ノ門いきいきプラザ → P4・5
- 9 タカトク金物 → P6
- 10 (旧)三和鋳螺 → P7
- 11 芝の家 → P8
- 12 港区架道橋 → P8
- 13 区立塩釜公園 → P8

港区芝地区総合支所協働推進課

〒105-8511 港区芝公園1丁目5番25号(港区役所1階)
TEL 03-3578-3192 FAX 03-3578-3180

ホームページ

<http://www.city.minato.tokyo.jp/>